

身近な環境配慮行動におけるマイボトルのイメージ・印象と行動の誘因との関係

佛教大学 正会員 ○水上 象吾
佛教大学 林 隆紀

1. 研究の背景と目的

地球環境問題は現在、悪化の状況に直面しており一人一人の環境配慮行動が求められている。身近に取り組みが可能な環境配慮行動は、主には屋内での家事から、屋外では生活範囲での活動やイベントへの参加等が、その対象として認識されている。行動の意図としては、環境保全自体を直接の目的とする行動から、経済的な節約の結果として付随して得られる行動まで複合的である^{1) 2)}など。人々が取り組む環境配慮行動の規定因にはどのような共通項があるのか、行動に対する人々の印象はどのような構造になっているかを明らかにすることは、行動を促進する上で重要である。

本研究は多様にある身近な環境配慮行動を整理し、特に水筒等の再利用可能なボトルを持ち運ぶ行動（マイボトル）に注目する。マイボトルは屋内から屋外へ携帯し行動範囲に幅があり、他者が見かける機会もあるため配慮行動の周知にも影響を与えられ考えられる。近年、再利用可能なボトルは軽量化、保温性の高さ、飲みやすさ・洗いやすさや炭酸対応など、ユーザビリティの高い製品が開発されてきた。ペットボトルごみ削減に向けた対策に加え、新型コロナウイルス感染症対策の一環として直飲み冷水機の撤去されたり個食が進むことでもマイボトルの普及が促されたと考えられる。このような位置づけにあるマイボトルの持参が、多様な環境配慮行動においてどのような位置づけにあるのか、そして人々はどうのようないメージ・印象を持っているのかを明らかにすることを目的とする。

環境への配慮とは、将来的な利益や持続可能性に対する行動となるため、その態度には時間割引率や年齢も影響する。未来の時間が長い若者は保全の結果、将来のリターンを見込める可能性がある。しかし、若者は関心がないわけではないが行動していない割合も高く、理由として面倒くささ、利便性重視等の報告もある³⁾。今後の環境保全に向けては若者の態度を把握することが重要であるため、本研究では学生を対象に環境配慮行動やマイボトルに対する態度、意識を明らかにする。

2. 研究の方法

2. 1 アンケート調査

現在の日本において身近な環境配慮行動と認識されている主な行動を多くの既存研究を整理し、20 項目を取り上げた。これらの行動頻度（「いつもしている」から

「ほとんどしていない」の4段階)を把握するため、大学生を対象にアンケート調査を行った。

表1 アンケート調査の概要

調査時期:	2022年7月14日～8月3日
対象:	佛教大学(7学部15学科)京都市 ※通信教育課程は除く
対象者:	佛教大学学生6256人(学部生6134人、大学院生122人)
回答数(率):	706人(11.3%), 男性42.9%・女性54.5%

2.2 分析方法

身近な環境配慮行動 20 項目に対する取り組みを因子分析にて分類し、共通する条件を把握した。ついで、マイボトルに対するイメージ・印象を SD 法 (Semantic Differential Method) にて把握し、印象の構造を因子分析にて明らかにした。マイボトル持参の取り組みと、印象の因子得点との関わりを重回帰分析にて調べた。

3. 分析結果

3. 1 身近な環境配慮行動の構造

身近な環境配慮行動 20 項目の因子分析結果（主成分法、バリマックス回転）を表 2 に示す。

表2 身近な環境配慮行動の因子分析結果

尺度	因子1	因子2	因子3	因子4
	外部参加型	節約型	自立代替型	規範型
環境保護に関する活動に参加	0.786	-0.013	0.267	0.016
地域のゴミ拾いや掃除などの活動に参加	0.748	0.026	0.231	0.002
鉢植や庭木など身近な緑を育てている	0.638	0.158	0.019	0.116
フリーマーケット等を活用し物を再利用	0.505	0.080	0.189	0.143
学校や自治体などの資源回収に協力	0.477	0.158	0.188	0.330
風呂の残り湯や雨水を利用	0.417	0.335	-0.038	0.047
エコマーク商品など環境にやさしい製品の購入	0.400	0.223	0.388	0.222
レジ袋をもらわないようにマイバッグを持参	0.065	0.496	0.230	0.103
中身の詰め替えができる商品の購入や利用	-0.022	0.453	0.264	0.303
水筒などの再利用可能なボトルを持ち運ぶ	0.269	0.448	0.147	0.038
食品を必要以上に買わない、食材を使い切る	0.149	0.392	0.116	0.378
不要な電気は消す、身近な節電	0.100	0.388	0.203	0.239
水道を適切に閉じない、などの節水	0.003	0.345	0.102	0.312
服装の流行廃りに乗らない	0.081	0.060	0.535	0.133
コンビニで割り箸やスプーンなどをとらわない	0.245	0.257	0.427	0.127
移動手段として徒歩や自転車ところをかける	0.127	0.234	0.405	0.093
エレベーターではなくなるべく階段を使う	0.191	0.182	0.376	0.018
ものを修理して使うなどむやみに買替えない	0.221	0.332	0.374	0.305
ゴミを分別して出す	0.108	0.192	0.047	0.624
油や食べかすなどを排水溝から流さない	0.108	0.078	0.172	0.617
寄与率(%)	15.45	11.59	10.46	10.23
累積寄与率(%)	15.45	27.03	37.49	47.72

分析の結果、4つの因子で構成されていることが示された。第1因子は、「環境保護活動に参加」、「地域のゴミ拾い掃除活動参加」など、屋外での行動や社会的なイベントへの参加を含む尺度に対して負荷量が高いことから、『外部参加型』と解釈した。第2因子は、「マイバック持参」、「詰め替え商品の購入利用」、「水筒等を持ち運ぶ」、食品や電気、水などの節約に関する行動の負荷量

キーワード 環境配慮行動、マイボトル、印象、アンケート調査

連絡先 〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96 佛教大学 TEL075-491-2141

が高い。日常生活費の節約に繋がることから『節約型』と解釈した。第3因子には、服装の流行にのらず、店頭で配布される消耗品を遠慮したり、エレベーターを利用せずに階段を使用するなど、個人的な費用の節約にはつながらない行動も含まれる。今ある物で間に合わせる行動と捉えられ、利便性や快適性を優先せず代替的に補う行動であるため、『自立代替型』と解釈した。第4因子は、「ゴミの分別」と「排水溝から流さない」尺度が高い負荷量を示す。目先の手軽さにとらわれず自己の負担を伴い倫理的な行動であるため『規範型』と解釈した。

以上より、環境配慮行動実践の背景にいくつかの共通の意図を見ることができ、一部は社会的参加とかかわる行動とみることができ、他の行動は生活費の節約につながることや行動の代替が可能なこと、社会的規範が行動の志向につながっていると捉えることができる。

3. 2 マイボトル持参に関する行動・意識

(1) マイボトルに対する印象構造

つぎに、水筒や再利用できるボトルを持ち運ぶこと（マイボトル）に対するイメージ・印象を、関連すると考えられる10の形容詞対を取り上げ、対義語とどちら側の印象に近いかを5段階にて把握した。得られた回答から因子分析を行い3つの因子が抽出された（表3）。

表3 マイボトルのイメージの因子分析結果

	因子1	因子2	因子3
	スタイル感	利用感	エコ感
かっこいい⇔かっこ悪い	0.847	0.120	0.087
誇らしい⇔恥ずかしい	0.797	0.153	0.202
おしゃれ⇔おしゃれでない	0.700	0.151	0.076
尊い⇔卑しい	0.624	0.237	0.289
健康⇔不健康	0.425	0.303	0.405
便利⇔不便	0.134	0.802	0.193
手軽⇔面倒	0.135	0.750	0.072
快適⇔不快	0.408	0.577	0.234
お金の節約になる⇔ならない	0.097	0.138	0.734
環境によい⇔よくない	0.178	0.118	0.674
寄与率%	26.57	17.81	13.91
累積寄与率%	26.57	44.38	58.29

第1因子は「かっこいい・悪い」「誇らしい・恥ずかしい」等の負荷量が高いことから『スタイル感』を意味する因子であると解釈した。第2因子は、「便利・不便」「快適・不快」等の負荷量が高いことから『利用感』を意味すると解釈した。第3因子は「お金の節約になる・ならない」と「環境によい・よくない」の2項目の負荷量が高い。経済（エコノミー）を意図した行動と環境（エコロジー）保全を意識された軸と捉えられることから『エコ感』を意味する因子と解釈した。

マイボトルは、そのスタイル感に加え、利便性や快適性などの利用感が意識され、マイボトル使用の結果として経済的節約や環境保全につながることで印象の主な背景にあると考えられる。

(2) マイボトル持参にかかわる因子

マイボトルのイメージ・印象の因子分析から得られた3つの因子得点を独立変数とし、「水筒などの再利用可

能なボトルを持ち運ぶ」行動（図1）を従属変数とする重回帰分析を行いその影響を調べた（表4）。

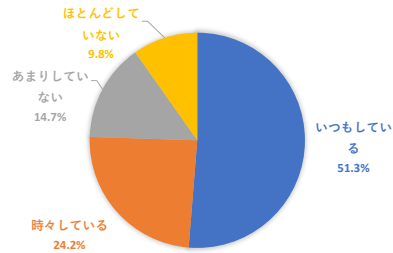


図1 水筒等の再利用可能なボトルを持ち運ぶ頻度

表4 マイボトル行動を説明する重回帰モデル

従属変数	独立変数	非標準化係数β	t値	有意確率
水筒などの再利用可能なボトルを持ち運ぶ	スタイル感(因子得点1)	0.058	1.798	0.073
	利用感(因子得点2)	0.473	14.613	0.000
	エコ感(因子得点3)	0.166	5.110	0.000
	定数		56.430	0.000
n=705	R=0.527	R ² =0.278		P=0.000

分析の結果、有意な関係が認められ、マイボトル持参の行動を規定する要因として説明することができる。各因子の説明力の強さを標準化係数にみると、『利用感』が0.473と高く、『エコ感』も0.166の強さを示した。『スタイル感』のかかわりは認められなかった。

マイボトルのイメージ・印象は『スタイル感』が強く寄与していたが、実践する行動には、使用感、利便性や快適性の高さが強く影響している。また、行動の結果として経済的節約や環境保全に繋がるとの意識も実践につながると考えられる。

4. 考察

本研究は身近な環境配慮行動の構造を明らかにし実践の意図を検討した。またマイボトルのイメージ・印象を調べ、マイボトルを持ち運ぶ行動への影響を示した。利便性や快適性などの利用感の高さや経済的節約や環境負荷低減に繋がるなどのエコ感が行動のインセンティブになると考えられる。以上の結果は、環境配慮行動を誘因するために、イメージや印象のどのような部分を顕示していくかを考える材料となると考えられる。

参考文献

1) 松本和晃・神子直之・清水聡行（2012）「環境配慮行動の社会性による規定因の差異に関する研究」土木学会論文集G（環境）Vol. 68, No. 7, pp. 453-461
2) 平湯直子（2018）「環境配慮行動の規定因に関する理論と実証研究」武蔵野大学政治経済研究所年報 16号, pp. 225-247
3) 松原小夜子・後藤春香（2012）「日常生活における20代若者の「もったいない」意識と実際の行動」人間と生活環境, 19（2）, pp. 153-160

〔付記〕本研究は佛教大学エコキャンパスプロジェクト「環境や社会に対する考え方についてのアンケート」の調査結果の一部である。